

# 食生活調査にみる家族リアリティの変化

——食事スタイル・コミュニケーション・子ども——

東京学芸大学 野田潤

## 1 背景及び目的

1990年代以降、家族の個人化や個別化、私事化が指摘されるが、こうした流れの中、社会的には個食化という言葉が広がるなど、家族の食の変化もまた注目されている。こうした食の変化を岩村暢子は「個化する家族」というキーワードで描き出している（岩村 2003）。だが岩村の一連の調査は1990年代後半以降の首都圏における定性的なものであり、同じ質問項目で長期間継続的に行われた定量的な全国調査は多くない。

本研究は定量的な全国調査のデータを用い、近年起こりつつあるという家族の変化の内実の一端を明らかにするという問題関心のもと、主に個食化とコミュニケーション、子どもの意味に注目しながら、1980年代後半以降の食卓の変容を探る。

## 2 方法

味の素広報部が全国の有配偶女性を対象として企画・実施しているAMC調査（無作為抽出の全国調査）のうち、同一質問の比較が可能な1988年（N=1200）、2000年（N=1530）、2012年（N=1800）の個票データを用いて経年比較を行った。なお各調査年で母集団の年齢幅が異なるが、本研究では分析対象を20代～60代にそろえた。

## 3 結果

全体的に個食化傾向が見られたが、朝食と夕食では個食化の内実や意味が異なり、影響する変数もそれぞれ異なる。夕食時の会話については、乳幼児のいる層に限っては減っておらず、乳幼児の有無と会話の関連性は、特に近年強まっている。月に1度以上夕食を共にできる人は、たとえ共食の機会自体は減少していても、夕食時には会話が多い。さらに個別盛りつけの減少は妻の就業形態と同居家族人数に影響を受けており、忙しい人が時間短縮のために盛りつけを省略していると言える。こうした盛りつけ省略は、夕食でよく会話する層において顕著に見られるが、夕食の会話が少ない層には見られない。最後に、料理の楽しさには仕事外出時間および年収の影響が見られた。

## 4 結論

個食化の進行は特に朝食で顕著である。しかし家族で食卓を囲む機会が減っても家族のコミュニケーション志向が減るとは限らない。また、盛りつけの省略化は、多忙な共働き層がそのぶん共食や会話に注力するための手段でもありうる。丁寧な個別盛りつけをしているからといって会話が密だとは限らず、調理行動の綿密さと家族関係の密度は別物である。さらに、近年では乳幼児の存在が夕食時の家族の会話を減らさない方向に機能しつつあり、家族の生活に対して子どもの占める意味・比重が増大している可能性が示唆される。

## 謝辞

本研究は味の素株式会社広報部よりデータの無償供与と学術的分析の許諾を得たことを記し、ここに謝意を表します。

## 文献

岩村暢子 2003 『変わる家族 変わる食卓』、勁草書房。